明日への道標

センス・オブ・ワンダー
―レイチェル・カーソン 沈黙の春―

㈱日本設備工業新聞社
代表取締役社長　高倉克也

環境問題が社会的問題として意識されたのはいつなのか。それは1962年と明確に答える人々がいる。歴史を変えることができた数少ない書籍『沈黙の春』が発行された年なのだと。

著者のレイチェル・カーソン(1907－1964）はアメリカ内務省魚類野生生物局の職員として海洋生物学を研究する。執筆活動に精を出し、退職後はノンフィクション作家として活躍した。

環境汚染を告発した『沈黙の春』は友人の手紙をきっかけに誕生する。当時は化学物質の危険性が検証されないまま農薬として大量に使用された。農地に殺虫剤が空中散布され、友人の庭に飛んできた小鳥たちが次々と死んでしまう。小鳥たちのさえずりが聴こえない沈黙の春に直面する。

海に魅せられベストセラー

レイチェルはペンシルベニア州スプリングデールにある家族経営の農場の娘として生まれた。広大な自然と本を読むことが好きで動物を主人公にした物語を書き始める。とりわけ海に魅せられ、ロバート・ルイス・スティーヴンソンの『宝島』、ハーマン・メルヴィルの『白鯨』、ジョゼフ・コンラッドの『闇の奥』などの海洋小説を愛読した。

ペンシルベニア女子大学では英文学を専攻し、途中から生物学へ移行する。勉強の傍ら学生新聞の編集に熱心で精力的に記事を書く。

優秀な成績で卒業後、ジョンズ・ホプキンス大学大学院で動物学と遺伝学を学んだ。研究室では教授のアシスタントとなり、ショウジョウバエやネズミの世話をして学費の足しにした。

レイチェル・カーソン

修士号を取得後、父親が急逝し、公務員試験を受けて内務省に入省する。レイチェルは海洋生物に関する研究を市民にわかりやすく紹介する仕事を担当した。パンフレットの作成や新聞への寄稿など意欲的に働いた。その一方で姉が亡くなり、母とふたりの姪を養うことになる。

詩情を込めた海洋生物の記事は好評で出版社からエッセイの依頼が相次ぐようになった。発表した作品を編纂した『潮風の下で』などを出版し、有能な著作家として注目を集めていく。

第２次世界大戦が激化すると予算のほとんどが軍事関係に投入され、自然科学に関する研究は片隅に追いやられた。1945年、マンハッタン計画で開発された原爆の日本投下を最後に世界大戦は終結する。再生した魚類野生生物局でレイチェルは出版物の編集長に昇格し、海洋生物をはじめとするフィールドワークに情熱を燃やす。

彼女の仕事に関心を抱いたオックスフォード大学出版局は1951年に『われらをめぐる海』を

刊行する、ニューヨーク・タイムズやリーダーズ・ダイジェストに好意的な書評が掲載され、彼女は一躍ベストセラー作家となった。翌年、全米図書賞ノンフィクション部門賞などを受賞し、経済的にも安定して魚類野生生物局を退職する。

地球を守る唯一のチャンス

講演やインタビューの依頼が殺到するなかでレイチェルは新たに大西洋沿岸の生態系を調査し、『海辺』３部作を上梓する。この頃、生涯の友となるドロシー・フリーマンと出会い、親交を深めた。12年間にわたって交換した手紙は約900通に及び、のちに往復書簡集として公開される。

家庭では姉が亡くなってから一緒に暮らしてきた姪のひとりが肺炎を患い、５歳になる息子のロジャーを残して早逝した。レイチェルはロジャーを引きとり、メリーランド州ワシントン郊外のシルバースプリングに移り住む。

アメリカ農務省は1950年代後半から害虫根絶プログラムとして農薬の大規模な散布計画に拍車をかけた。とくに昆虫爆弾の異名を持つ有機塩素系殺虫剤ジクロロジフェニルトリクロロエタン＝DDTが多用され、安価で入手できることから開発途上国にも普及した。レイチェルは環境への残留性と危険性がきわめて高いDDTの大量使用を危惧し、綿密な情報収集を含め約4年の歳月をかけて『沈黙の春』完成へ精魂を傾ける。

執筆中に乳癌の宣告を受けながらも1962年、ついに出版へこぎつけた。発表当初から賛否両論を巻き起こし、半年で50万部を売り上げる。

冒頭「湖水のスゲは枯れ果て、鳥は歌わぬ」というキーツの詩の引用で始まる『沈黙の春』は最終章で「長いあいだ旅をしてきた道は素晴らしい高速道路で、すごいスピードに酔うこともできるが私たちはだまされているのだ。その行きつく先は禍いであり破滅だ。もうひとつの道はあまり人も行かないが、この分かれ道を行くときにこそ私たちの住んでいるこの地球の安全を守れる最後の唯一のチャンスがある」と化学物質の乱用に警鐘を鳴らす。社会的な反響を受けて大統領ケネディは科学諮問委員会を設け、本格的な調査を命じた。保守派や関係企業は激しく反発したものの、DDTの使用は全面的に規制されていく。

環境問題を人間が解決すべき課題として提起したレイチェルの先駆的な試みは多くの共感を呼び、時代を超えて国連の環境活動などに結実する。

あなた自身へのメッセージ

世界を揺り動かした歴史的話題作を刊行して２年後、レイチェルは癌の転移によって56歳でこの世を去る。生涯独身だった。親友のドロシーはレイチェルの遺言に基づいて遺灰の一部を譲り受け、かつて一緒に歩いたメイン州シープスコット湾の海岸に沿って彼女の遺灰を撒いた。

遺作となる『センス・オブ・ワンダー』は生前レイチェルが雑誌に書いたエッセイを一冊に編集して出版された。姪の息子ロジャーと海辺や森の中を散策し、生きものたちとふれあうかけがえのない体験を歓びと共に伝えている。

環境教育の必読の一冊となっている『センス・オブ・ワンダー』は「残念なことに私たちの多くは大人になるまえに澄みきった洞察力や美しいもの、畏敬すべきものへの直観力をにぶらせ、あるときはまったく失ってしまいます」と憂慮する。なぜそうなるのか。レイチェルは文明社会の暴走が人間と自然のつながりを希薄にしてしまったと説く。人間は自然の一部であり、自然が傷つけば人間もまた傷ついていく。人間は自然のすべての生きものと運命を共にしている。

未来に生きる子供たちは自然とのつながりを深める無限の可能性を秘めている。レイチェルは「子供たちには、地球上で最も素晴らしい冒険を味わう機会を与えてあげましょう。それは自然界における驚異に目覚めることです。子供たちには、自分自身で発見する喜びを味わわせてあげましょう。それは想像力を育みます」と大人たちに呼びかけた。センス・オブ・ワンダーとは自然の驚異に目覚める感性といっていいだろう。

自然とのふれあいで洞察力・直観力・想像力などが育まれるのは子供だけではない。レイチェルは「子供と一緒に自然を探検することは、まわりにあるすべてのものに対するあなた自身の感受性に磨きをかけるということです」とあなた自身へのメッセージを送り届けようとした。